

## VI. 情報・資料

### 1 北米から日本海へ大回遊したクロマグロ

南海区水研山中一技官よりの便りによると、米国水産庁(B. C. F.)のSan Diego 駐在 Flittner 氏より山中技官あてに下記のクロマグロ再捕に関する連絡があつた。

標識放流…(年月日は目下問合せ中の由)、Tag.番号A-374、放流場所 $29^{\circ}43' N$ 、 $117^{\circ}20' W$ 。(Guadalupe 島北東80哩、Baja California, Mexico)、推定体長65~70cm、推定体重139~172ポンド。

再捕……昭和39年6月18日、青森県西津軽郡深浦町字風合瀬沿岸、 $40^{\circ}44' N$ 、 $140^{\circ}00' E$ 。定置網(西定才6号)に入網。体重24.3kg、体長棚。とにかく北米西岸から日本海沿岸に大回遊していることが報告された。

### 2 マグロに及ぼす環境の影響

Vernon E. Brock (ハワイ大学・ハワイ海洋研究所長)  
[1964年1月30日 ローマICNAFシンポジウム講演抄]  
(宇田道隆 訳)

マグロは魚の中でも最も外洋性で運動力に富む。その分布、移動は好適環境の海区を反映し、みかけ上精密にその中の海況を反映する(今のところ海洋学者の手に負えないが、だんだん手のとどくところに来ている)。環境はすべてのマグロに影響する外的内的要素として考えられる。マグロに影響する環境変化は、その物理的悪化又は改善、餌の利用度、卵、稚仔の生残に対する一水域の適応度、競食又は他魚種の捕食を含む。他の環境の質の変化は寄生虫、魚病やマグロがその一部をなす海洋生物中の微妙な変化に関係して起り得る。目立つ環境の影響は反応(積極的又は消極的)を呼びおこす。活潑な反応は、位置移動、集群又は他の行動変化などある。これらは又魚体の大きさ、熟度などの変化と共に変化するだろう。受動的な反応は耐久度の一つで、死亡率、補充率と共に変わる。これらの場合の生残は適切な行動又は移動のパターンを通してでなく、魚種の再生産的、生理的、生態的はねかえりによつてである。

マグロの環境変化に伴う反応の適当なデータを得る問題は解決されていなかつた。

マグロに及ぼす環境の影響は大かたマグロ漁業に関するデータ、陸揚魚研究からのデータ、漁船および漁業研究船で海上作業から得られたデータによる。環境データは漁船、漁業研究船による。しかし商船、海洋調査船、気象定点観測船、軍艦、沿岸測点などから大量のデータが来る。環境、マグロのデータで時空的に同時収集のものはそう多くない。……最近柴田恵司(1963)はマグロ漁獲データからの推論が時に真実を示さないことがあるこ